

研究・調査報告書

報告書番号	担当
357	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption and the risk of colon cancer by family history of colorectal cancer. アルコール消費と、結腸直腸癌の家族歴による結腸癌のリスク	
執筆者	
Cho E, Lee JE, Rimm EB, Fuchs CS, Giovannucci EL.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Clin Nutr. 2012 Feb;95(2):413-9.	
キーワード	
アルコール、結腸癌、家族歴	
要 旨	
目的： 結腸直腸癌の家族歴をもつ個人は飲酒の副作用により大きな感受性があると考えられる。ここでは、飲酒と結腸癌リスクとの関連性が、結腸直腸癌の家族歴によって異なるかどうかを調査した。	
方法： Nurses' Health Study and Health Professionals Follow-Up Study にて、女性と男性それぞれにおいて前向き研究を行った。飲酒は、女性は 1980 年、男性は 1986 年の初回調査で評価された。	
結果： 87,861 名の女性の 26 年間の追跡調査と 47,290 名の男性の 20 年間の追跡調査の中で、結腸癌症例を 1,801 名 (女性 1094 名、男性 707 名) 認めた。最も摂取量が多いカテゴリーである 30g/日においてのみ有意で、有意な線形傾向は認めなかったが、より多い飲酒量が結腸癌リスク上昇に関連していた。飲酒と結腸癌リスクとの関連性は、結腸直腸癌の家族歴によって異なった。全く飲酒しない者と比べて 30g/日以上飲酒する者の多変量解析の相対リスクは、結腸直腸癌の家族歴のない者において 1.23 (95%信頼区間: 0.96~1.57)、結腸直腸癌の家族歴のある者において 2.02 (95%信頼区間: 1.30~3.13) であった (P=0.05)。家族歴のない全く飲酒しない者と比べて、30g/日以上飲酒する者、結腸直腸癌の家族歴を有する者の結腸癌の相対リスクは 2.80 (95%信頼区間: 2.00~3.91) であった。	
結論： 特に結腸直腸癌の家族歴を有する者においては、飲酒量が少ないほど結腸癌の発症が減ると考えられる。	